

## 2002年アジア大会水球競技における日本代表チームへのサポート事例

### ～代表チームとのコーディネーション～

南隆尚(鳴門教育大学) 大本洋嗣(東京情報大学) 榎本至(中央大学保健体育研究所) 藤本秀樹(慶応義塾幼稚舎) 鈴木茂廣(名城大学) 洲雅明(大分県立芸術文化短期大学) 高橋淳一郎(順天堂大学) 宮尾正彦(国立スポーツ科学センター) 原朗(東京情報大学)

Keywords ; 水球競技 ゲーム分析 チームサポート コーディネーション

#### 1 目的

近年の情報化は著しく、スポーツ界においても影響は大きい。昨年、国立スポーツ科学センター(JISS)が設立され、情報面におけるサポート活動も充実されてきた。しかし様々な情報をいかに扱うかは各競技において差は大きい。プロ化したスポーツやサポート体制の確立した競技とは、ソフト・ハード面、社会・経済面でも雲泥の差がある。水球競技では、1995年広島アジア大会から、筆者らが高木によるリアルタイムゲーム分析からサポートを行ってきた。前バンコクアジア大会では、ビデオ撮影とゲーム分析を、今釜山アジア大会では、男子日本代表チームに対して3回目となるサポートを実施した。(財)日本水泳連盟水球委員会の強化部と技術部等によるサポート活動の概要について報告する。

#### 2 サポートについて

2.1 強化期間 本大会でのメダル獲得と2002年世界選手権出場権獲得を目標に、昨年10月から約150日に及ぶ練習・遠征が行われた。その内容は週末通い練習・週末合宿の他、長期合宿、ドイツ・ポーランド遠征などである。トレーニングの過程において、技術部でこれまで検討されてきたフィールドテストを3月と6月にそれぞれ実施した。また、長期合宿などにおいて、シドニーオリンピック、ヨーロッパ選手権、福岡世界選手権、ヨーロッパ遠征等のビデオを自由に閲覧出来る環境を整備し、選手のモチベーションの維持・高揚を企図した。

2.2 大会期間 今大会では、組み合わせや登録選

手、レフリー割り等、情報入手の困難な状況が続き、種々の交渉に不具合を伴った。しかしながら、インターネットを利用した文書作成と送受信、携帯電話での情報交換、緊急対応など、日本から多くのサポートを受け、対応することが出来た。その活動は広報や国際担当と重複する面も多く、今後の重要なサポート項目となる。

ゲーム分析サポートスタッフからの情報は、監督・コーチとサポートスタッフのディスカッションにより選別、映像と紙面として選手に配信した。その手順は、試合を分析用と同時にチーム用にも録画、ミーティングでの利用の他、各選手が自由に観戦できるようにし、ミーティングの効率化、選手各自が必要な部分をチェックできるようにした。次に記述型分析システムにより日本チームのゲーム分析とフィードバック(以下FB)、また次対戦チームの全体及びポジション・利き手等の個人情報FBした。さらにパワープレーのセット攻防、特定選手のシュート映像などを編集し、情報を質的に高めた上でミーティングを実施した。また日本チームのモチベーション喚起を目的とした映像作成が行われた。

#### 3 まとめ

本大会において、代表チームへのサポートは各方面・多次元から行われた。随時調整し、交渉やミーティング等のチーム活動に有効に利用することができた。今後は、チーム強化に、効果的にサポートできるようチーム内にコーディネーターが配置されるか、各部がコーディネーションの意識をもって強化に関わることが望ましい。